

ログイン！

ゲーマー女子のMMOトリップ日記

主な登場人物

ユーリア

りあが作った、オンラインゲームの-avatar。
魔王の封印を守る「番人」の使命から逃れるため、魔法でりあと入れ替わった。

レクス

凄腕の冒険者。ゲーム世界に来て死にかけていたりあを助け、それ以来面倒を見ています。魔人ヴィクターを追っているらしいが、果たしてその理由とは――？

ハナ(精霊)

エディ(精霊)

夕野りあ

22歳の図書館司書。
オンラインゲーム「4spells」が趣味。昔から夢や目標がなく、ただ流されるままに生きてきた。

モニカ

冒険者ギルドの受付嬢。
種族は木の妖精であるドリアド。クックのことが好き。

クック

冒険者ギルドのマスター。
種族は犬の妖精であるクー・シー。顔は怖いですが、優しくて頼りがいがある。

アネッサ

男装の女冒険者。
騎士になることを夢見ている。可憐で美しい女性を見ると放っておけない。

ラピス

レクスの従者。種族は猫の妖精であるケット・シー。ただの猫扱いされると怒る。

魔人ヴィクター

魔王復活を企む魔人。
悪辣非道な性格。ユーリアが持つ「白の書」を狙っている。

ウィル

冒険者ギルドの教官。
体育会系で暑苦しいが、面倒見のいい男性。

目次

一章	魂の共有者	7
二章	始まりの町カノン	41
三章	情報探し	183
四章	花が降る町	246

一章 魂の共有者

「夕野さん！」

急に名前を呼ばれて、夕野りあはぎくりとした。棚に戻そうとしていた本を落としてしまい、慌てて拾い上げて軽く汚れを払う。

「どんくさいわねえ。あなた、またぼーっとしてたんでしょ。いいわよねえ、仕事ぶりが適当でもお給料をもらえて」

「ずけずけとした言い方で、関口秋穂はりあに嫌味をぶつけた。」

「あ、配置を間違えてるわよ。それは下の棚だって前にも言ったでしょ」

「……すみません」

りあは素直に謝りながらも、内心「また始まった」とうんざりしていた。

この市立図書館で司書として働くりあに、古株のボランティアである関口は、たびたび口出ししてくる。

新人の頃は『仕事を教えてもらえてありがたいな』と思っていたのほほんとしていたりあだが、あれから二年経った今では、関口と顔を合わせるのが嫌になっていた。関口はりあを出来損ないと見な

して、少しのミスでも大袈裟に騒ぐのである。

「だいたいあなた、なんで司書になったのよ？ 夢とか目標とか、何かあったんじゃないの？」

「ええと……」

りあは口ごもった。

なんとなくです、と正直に答えたら、関口が更にヒートアップするのは目に見えている。

（今日はツイてないわ……）

りあは幼い頃から、この手の質問を苦手としていた。

——あなたは何がしたいの？ 夢は何？ 人生の目標は？

りあには胸を張って語れるような夢はなく、親や教師が喜びそうな模範解答を口にして、どうにかやりすごしてきたのである。彼らに『こうすれば大丈夫』『こうした方がいい』と言われた道を選び、二十二歳になる今までずっと、ただ流されるままに生きてきた。

「……本が好きだからです」

今回も、りあは無難な返事をした。

本が好きなのは本当だが、司書になって何がしたいという目標は特にない。単に、自分にもどうかこなせそうだという理由で、りあは司書になることを決めたのだ。

短大で司書課程を学び、卒業してすぐに就職。とはいえ実務は思ったより大変で、最初はかなり苦労した。だが、二年経った今は仕事にも慣れてきている。

上司や同僚にも恵まれたが、関口とだけはどうしてもうまが合わなかった。

「はいはい、そんなの知ってるわよ。本が好きじゃなきゃ、こんなところで働かないでしょ」

関口はそう言って、他に何かないのかと無言のプレッシャーをかけてくる。りあは肩をすくめ、話題を逸らすことにした。

「ああ、そういえば、他にも仕事があるのを思い出しました。申し訳ありませんけど、また後ほど」
りあは会釈をして、ブックカードに積まれた本を素早く棚に戻していく。一方的に話を打ち切られた関口はむっとしていたが、館長に名前を呼ばれた瞬間、ころりと表情を変える。そして、いかにも機嫌がよさそうに「はい」と返事をしながら去っていった。

昼休みになり、りあは休憩所代わりの会議室でスマートフォンをいじっていた。

「あー、魔法が使えたらいいのにー」

りあの呟きを聞いて、同期の山中香苗が眉を寄せる。彼女は弁当を食べる手を止めて、りあの方を見た。

「どうしたの、急に。頭でも打った？」

「しいっ！ 大きな声で聞いちゃ駄目よ、香苗ちゃん。……りあちゃん、今日も関口さんとトラブってたから……」

心配そうに言ったのは、先輩職員の伊藤泉だ。

「ああ、またあのおばさんか。りあって大人しいから、いつも標的にされてるもんね。たまには言い返せばいいのに！」

「まあまあ」

気の強い香苗を泉が宥める。泉はりあ達より五つ年上だが、いつも穏やかで優しい。りあのスマートフォンを覗き込んで、香苗が怪訝な顔をした。

「何それ」

「今、私がハマってるオンラインゲームの攻略サイトだよ。作りたい武器があるんだけど、どのエネミーが素材をドロップするのか分からなくてさ」

「もしかして『4spells』？ 前からプレイしてるやつ」

「そうなの！ ほら見て、精霊とか魔物とか、デザインがすごく可愛いでしょ？ 私は魔法使いなんだけど、この間、やっとレベルがカンストしたの！」

りあの言葉に、同僚の二人は顔を見合わせた。

「エネミー？ 素材？ ドロップ？ カンストって何かしら」

きょとんとした顔で尋ねた泉に、香苗はああ、と言って説明する。

「先輩、ゲームしない人だから分かりませんよね。エネミーっていうのは敵キャラのことで、倒すと色んなアイテムをドロップ——つまり落とすんですよ。それを集めて武器や防具を作るんです。カンストっていうのは、レベルを限界まで上げたって意味です」

「へえ、ずいぶんやり込んでるのね。なんだか意外。りあちゃんって、休みの日は木陰で読書してそんな雰囲気なのに」

「今はスマフォのアプリゲームもたくさんあるから、りあみたいな女の子のゲーマーも珍しくない

ですよ。……それで、りあ。魔法を使ってどうしたいのよ。あのおばさんを、ドカンと吹き飛ばしちゃうとか？」

そう言っ、香苗はにやりと笑う。

「香苗ちゃんってば、物騒だなあ。そんなことしないよ。魔法で透明になって、関口さんに見つからないようにしたいだけ」

「私が透明になれば、犯人が誰か分からないし遠慮なくドカン！ とさせてもらうな」

正直すぎる香苗を、泉が苦笑しながら宥める。

「まあまあ。気持ちは分かるけれど、危ないこと言わないの。……りあちゃんも、関口さんのことは適当にあしらった方がいいわよ。あんまりひどいようなら、館長に頼んで注意してもらうから」

「はい」

「分かりました」

香苗とりあは素直に返事をした。

「先輩と香苗ちゃんがいてくれてよかったなあ。私一人だったら、毎日泣いてたかも」

「そうね。私も先輩がいなかったら、毎日あのおばさんと喧嘩してたかも」

「あなた達って、本当に正反對よねえ」

泉は呆れたように笑って、壁掛け時計を見た。そして、自分の休憩時間は終わりだと言って会議室を出ていく。

そこで香苗が、ふと何かを思いついた様子で、りあに話しかけてきた。

「ねえ、りあ。今度、旅行に行かない？ 魔法が使えるファンタジー世界には行けないけど、せめて夢の国に」

「いいね、行く行くつ。後でシフトチェックしてみる！」
香苗のナイスな提案に、りあは明るい声で賛成した。

りあが自宅アパートに帰ると、夜の九時を回っていた。遅番の日はいつもこんな感じだ。
コンビニ弁当で夕食を済ませ、お風呂に入ってから、お気に入りのルームウェアに着替える。
こじんまりとしたアパートのワンルームが、りあのお城だった。

ベッドの横に置かれたこたつ机の上には、白いノートパソコンがある。その電源を入れると、りあは冷蔵庫の方へ向かった。

コンビニデザートと、オンラインゲーム。たまに読書と映画鑑賞。それらが、りあの毎日に小さな楽しみを与えてくれている。

中でもオンラインゲームは一番の趣味と言えた。故郷の妹にすすめられて、なんの気なしに始めたのだが、今ではどっぷりハマってしまっている。

「夢の国かあ……」

ショートケーキを皿に載せ、炭酸ジュースをグラスに注ぎながら、りあは溜息まじりに呟いた。
夢の国というのは、ファンタジックな世界観が人気のテーマパークのことだ。そこにいる間はとても楽しいけれど、仕事に戻るとすぐ憂鬱な気分になる。

その原因は、りあの引込み思案な性格にあると思う。たとえば誰かに嫌味を言われたとしても、反論できたためしがない。おかげで相手が去った後、もやもや感だけが残ってしまう。

そうした日々のストレスを、りあはオンラインゲームで発散しているのだ。

ゲームの世界はりあにとって、まさに夢の国。ファンタジックな世界を自由に歩き回り、夢と冒険に満ちたストーリーを追っていると、心が躍った。

「もしもあの世界で暮らしたら、いったいどんな気持ちなのかしら……」

ふとそんなことを考えてしまい、りあは苦笑いして首を横に振る。

「……いや、あんな時代遅れな世界では生活できないわ。水洗じゃないトイレなんて最悪だし」

夢見がちなくせに妙に現実的なところもあるりあは、そんな面白味のない結論に行き着くだけだった。

「それよりも、早くゲームしようつと」

明日は水曜日で、りあにとつての定休日だ。毎週火曜の夜はおいしいコンビニスイーツをお供に、夜更かしするのが恒例となっている。

ケーキの皿とグラスを手に、りあはこたつ机に戻る。ちょうどいいタイミングでパソコンが立ち上がったので、さっそくゲームのアイコンをクリックした。

—— ネットワーク型オンラインゲーム『4spells』。

りあがこの一年、ずっとハマっているゲームである。可愛いキャラクターや世界観、そして初心者にも優しい操作性が売りだ。

……はるか昔、大魔法使いが魔王を荒地に封印し、その時の呪文を四冊の本に分けて書き記した。それを四人の魔法使いが一冊ずつ持ち、『封印の書の番人』として守っている。プレイヤーは旅をしながら番人達と関わり、魔王復活をもくろむ魔物や魔人と戦う……というストーリーになっている。

りあがゲームにログインすると、画面にアバターが表示された。

腰まで届く灰色の髪と、華色^{すめいいろ}の目をした美女が、優しい微笑みを浮かべている。りあがマウスを動かしてカーソルを載せると、美女はにつこり笑って手を振った。

アバターの名前はユーノリアという。本名の『夕野りあ』を片仮名にしかたけという、安直な名前だ。りあは自分のアバターを眺めて、ほうっと息を吐く。

（可愛いな）。もし私がファンタジー世界に生まれ変わったら、こういう乙女ちつくな服を着てみたい……）

白と青を基調とした清楚^{せいそ}なワンピースに、膝^{ひざ}下丈のサブリナパンツ。左手に籠^{かご}バッグ、右手に白い杖を持ったユーノリアは、童話に出てくる善き魔女といったイメージだ。

こんな容姿だったら、につこり微笑むだけで、関口のような人間も簡単に撃退できるだろう。いや、そもそも意地悪してくる人などいないのかもしれない。

「いいなあ、ユーノリアは。強くて美人で、悩みなんで一つもなさそうで。私も気ままに冒険した

り、旅をしたり……そんな生活してみたい」

普段なら思わないようなことを呟^{つぶや}いて、りあは自嘲気味に笑う。今日も関口にやり込められたせいで、精神的に疲れているのだろう。

その時、ふいに強い視線を感じた。

「ん？」

つい周りを見回したが、当然誰もいない。窓のカーテンが中途半端に開いていたので、そのせいかなど思ってきつちり閉め直す。

そうして再びパソコンの前に座ると、りあはゲームをスタートさせた。

翌朝、いつもより遅い時間に目を覚ましたりあは、簡単な朝食を取ってからゲームを再開した。強い武器を作るための素材が、あと少しで集まる。それを午前中に終わらせて、お昼ごはんはちゃんとしたものを作ろうと考えていた。

画面の中では、アバターのユーノリアが雪山のエリアに立っている。年中雪風が吹きすさぶ、ホワイトローズ・マウンテンと呼ばれる場所だ。

りあが使いたい武器を作るには、このエリアに棲息^{せいそく}する魔物が落とす、レアアイテムが必要だった。だが、三十四倒して一回落とすかどうかという低めの確率なので、地道に戦うしかない。

「こういう時は、誰かとパーティを組んだ方が楽んだけど……。一人でのんびりプレイしたいのよね」

パーティーは三人まで募ることが出来る。フレンドと呼ばれる仲よしのプレイヤーに頼むか、もしくは手が空いているプレイヤーに臨時で頼むかだ。

りあにはフレンドがいないので、誰かとパーティーを組むならば後者しかない。けれどゲーム内でまで人に気を遣いたくなくて、りあはパーティーを組むことを避けていた。たまに他のプレイヤーから誘われて乗ることもあるが、基本的にはソロプレイを楽しんでいる。

ぼやいていても仕方がないと、りあは地道に魔物を倒していく。レベルが最高値の100に到達しているりあにとつて、レベル40台の魔物しか出ないホワイトローズ・マウンテンは、難しいエリアではない。せっせとマウスを動かし、魔物にカーソルを合わせては、魔法で遠距離攻撃を仕掛けた。

キーボードのF1やF2などのキーを押せば、一発で魔法を発動させられる。画面の右側にはウインドウが出ており、そこから好きな魔法を選んで発動させることもできるが、F1やF2のようなショートカットキーを使った方が速い。右手でマウスを操作しながら、左手で攻撃できるのだ。ちなみにF1キーには炎の魔法が登録してある。押すと鮮やかな真紅の炎が杖から飛び出し、魔物にぶつかって派手な爆発を起こした。

怒った魔物の反撃を、ユーノリアがひらりとよける。すると、ワンピースの裾がひらひらとはためき、まるでダンスをしているみたいだった。

「いいなあ……こんな風に冒険しながら、自由気ままに生きてみたいな」

ファンタジー世界を旅する自分を想像して、りあは一人類を緩める。魔法使いとして仲間の援護

をしていると、そのうち友情や恋が芽生えて……

そんな夢のようなストーリーが頭の中で展開し始めた時、奇妙なことが起きた。

——それなら……私と入れ替わってみる？

「へ？」

突然誰かの声が聞こえて、りあはきよんとする。パソコンの画面を見ると、いつの間にか戦闘は終わっていて、ユーノリアがこちらを向いていた。

りあは思わず目を丸くする。ゲーム内のカメラを操作して、視点を変更しない限り、アバターがこちらを見ることはないはずだ。

(しかも今、アバターの口が勝手に動いてなかった?)

このゲームにおいて、アバターは一切しゃべらない。ゲーム内に元々存在するキャラクターはしゃべるが、アバターは彼らと話す時も、簡単なジェスチャーしかないのだ。

りあはユーノリアの顔をまじまじと見つめてから、視線を逸らして大きな溜息を吐く。

「ストレスのせいで、とうとう幻聴まで聞こえ始めたのかしら」

まさか、ここまで精神的に追い込まれているとは思わなかった。今日は大事をとって早めに寝た方がいいかもしれない。りあは、そう思っていたのだが……

——ねえ、こっちを見て？

また声が聞こえた。鈴を転がすような綺麗な声だ。

りあが恐る恐る画面を見ると、ユーノリアが籠^{かご}バッグから白い本を取り出し、大きく広げる。開かれたページに、青色の魔法陣が浮かび上がった。

ユーノリアがどこか申し訳なさそうな笑みを浮かべた瞬間、画面からまばゆい光が迸^{ほとと}る。「きゃあっ！」

りあは思わず悲鳴を上げ、腕で目をかばった。

しばらくして、光の洪水がやんだのを感じたりあは、目をかばっていた腕を下ろす。

「あれ？」

りあは暗い空間に、ふわふわと浮かんでいた。

ここはどこだろうと思ったが、すぐに夢の中だろうと考える。ゲームをしていたはずなのに、いつの間に眠ってしまったのだろう。しかし、ずいぶんリアルな夢だ。

まるで水の中にいるようだけれど、不思議と息はできる。

背後に明るさを感じて振り返ると、うつすらと輝く鏡のようなものを見つけた。

りあはスーツとそちらに近付く。

「何これ？」

鏡のようなものを覗き込むと、向こう側に誰かが立っていた。

長い灰色の髪を持ち、青と白のワンピースを着た美しい女性——アバターのユーノリアだった。

「初めまして、天界の方。私はユーノリア、あなたと同じ魂を持つ者です」

「魂……？」

ユーノリアはこくりと頷いて、深く頭を下げる。

「私の召喚^{しょうかん}に応じてくださり、感謝いたします。あなたは私をうらやましいと言った……だからきくと、この禁じ手の魔法も上手くいくと思いました」

「うらやましいなんて、言ったっけ？」

りあは首を傾げたものの、昨日ゲームをしながら確かに言ったなと思い出した。

そういえばと頷くりあを見て、ユーノリアは再び話し始める。

「私の住む地界と、あなたの住む天界には、稀^{まれ}に同じ魂を持つ者が生まれることがあります。その場合、こうして魔法で呼び出すことができるんですよ。失礼ですが、あなたのお名前を伺っても？」

「りあよ。夕野りあ」

「名前も、私と同じなんですネ……」

大きく見開かれたユーノリアの目から、涙が零^{こぼ}れた。ぱたぱたと音を立てて、次々と落ちていく。「本当に……いたんですね、私を見守ってくれている人が。私は、ずっと一人ぼっちだと思っていました。でも、そうじゃなかったんですね」

「あ、あの、大丈夫？」

りあは心配になって、鏡越しに尋ねた。すると、ユーノリアは首を横に振る。
「いいえ……。辛すぎて、もう死んでしまいたいくらいなんです。でも、私が死んだら魔王が復活してしまふ。罪のない人達を巻き添えにすることなんてできない……」

はらはらと涙を流しながらも、ユーノリアはりあをまっすぐに見つめる。

「平凡を望んだ私と、非凡を望んだあなた。二人の意思が重なり、引き合ったのです。私の術に添えてくださったんですもの、本当はあなたも私の望みを分かっているのでしょうか？」

ユーノリアは小首を傾げて、そう問いかけてきた。
りあは意味が分からず、言葉に詰まってしまふ。

「ごめんなさい……。私は弱いから、あなたを呼んでしまった。でも……お願いです、私を助けてください」

ユーノリアはそう言っ、鏡のようなものに左手で触れた。そこから光の波紋が広がる。

彼女の声はこちらの胸が引き裂かれそうになるくらい、深い悲しみに満ちていた。アバターに助けを求められるなんて本当におかしな夢だと思うが、それでもりあには放っておけなかった。

「大丈夫よ。……ね？」

優しく慰めて、りあはユーノリアの左手に自分の右手を重ねる。

その瞬間、変な感じがした。

意識が飛んだような、何かが切り替わったような、不可思議な感覚。

りあが目^{しばた}を瞬かせると、鏡の向こうに自分が立っていた。背中まである長い黒髪と、一重^{ひとえ}の目



をした地味な女は、間違いなくりあ自身だ。

「あれ？ やっぱ普通の鏡だったの？」

驚くりあを見て、鏡の向こうの、＼りあ＼が不思議そうにしている。

「違います。これは境界線ですよ。あなたのいる天界と、私のいる地界の狭間^{はざま}」

＼りあ＼はりあをじっと見つめて、丁寧に説明した。

「夕野りあ様、これから私が言うことをしっかりと聞いて、覚えてください。あなたは白の書の番人ユーノリア。魔王を封印した呪文を、魔人や魔物から守るのが役目です。この役目から解放されるのは、あなたが死ぬ時だけ。私はそんな生活に疲れ果てて、でも死にたくはなくて……この禁じ手を見つけたんです」

ごめんなさい、と＼りあ＼は謝った。

「入れ替わってください。ありがとうございます。詳しいことは、私の使役^{しえき}している宝石精霊^{ほうせきせいれい}達から教わってください。これからは、お互い楽しく生きていきましょう」

「た、楽しく生きていきましょうって……え!? 入れ替わり!?」

りあは慌てて鏡に張りついたが、その表面は次第に白く濁^{にご}っていく。

向こう側が完全に見えなくなる寸前、＼りあ＼がこちらに手を振って、頭を深く下げるのが見えた。

「ちよっと、りあ! いや、ユーノリア? 待ってよ! 待って!」

もはやただの白い壁と化した鏡を叩いてみたが、返事はない。そこでふいに、りあは自分の体が後ろに引つ張られるを感じた。



ぱちりと目を開けると、ごつごつした灰色の天井が広がっていた。りあは地面に仰向けになった状態で、右手を天井に向かって伸ばしたまま、数回瞬き^{まばた}をする。

「あ……れ……? 夢……?」

やはり夢だったのかと、りあは安心する。手を下ろして目を瞑^{つぶ}り、ふうと息を吐いた。

「……ん？」

さっき、アパートの天井とは明らかに違うものが見えたような気がする。

恐る恐る目を開けた瞬間、りあの視界は白くてもふもふしたものに覆^{おほ}われてしまった。

『起きたんですね、ユーノリアしまーっ!』

「むぐっ!？」

鼻と口を塞^{ふさ}がれ、りあは驚いて飛び起きる。その勢いで、もふもふはりあの顔から転がり落ちた。

『駄目じゃないの、エディ。驚かせちゃ』

『ごめんなしやい』

ピンク色のリボンをつけたハリネズミが叱ると、青いリボンをつけたフェレットが、耳をぺたんと寝かせて謝った。どちらの背中にも、光り輝く羽が四枚生えている。

しかも二匹は、完全に宙に浮かんでいた。

「しゃべった……浮かんでる……何これ」

上半身を起こしたりあは、まじまじと二匹を見つめる。

『ひどいです、ユーノリアさま。宝石精霊のエディとハナです！「これ」じゃないです！』

『エディ、静かに。……私達がお分かりにならないということは、禁じ手の魔法が成功したのですね。私はハナ、そちらはエディ。どちらも宝石精霊です』

「エディ、ハナ……宝石精霊？ ゲームと同じだわ」

りあは呆然として呟いた。

『オースベルズ
『Aspells』では、宝石に宿る精霊——宝石精霊をベットとして飼うことができる。戦闘をサポートしてくれるので序盤は重宝するが、基本的な能力が低すぎるため、中盤以降はただのマスコットではない。けれど可愛らしくて癒やされるという理由で、ほとんどのプレイヤーはベットを連れていた。』

りあは二匹の宝石精霊を飼っていて、それぞれエディとハナという名前だった。フェレットとハリネズミであるところもゲームと同じだ。

「まだ夢を見るのかしら……。それにしても変な夢ね」

いくらゲームにハマっているとはいえ、これはひどい。

頭痛を覚えたりあが首を横に振った時、地面から冷気が這い上がってきていることに気付いた。寒さに震えながら地面を見下ろすと、何かの魔法陣の上に座っているようだった。

魔法陣はチョークで書かれているらしく、地面についていた手には白い粉が付着している。りあ

は手をはたいて粉を落としてから、改めて周りを見回した。

どうやら、どこかの洞窟の中にいるようだ。魔法陣の四隅には青く光る石が置かれていて、その光が洞窟内をぼんやりと照らし出していた。

ために立ち上がってみると、天井がかなり高いことが分かる。灰色の岩肌に囲まれた空間は広く、左右に通路が伸びていた。光の届かない通路は真っ暗で、その奥に何があるかは見えない。

落ち着かない様子で辺りを見回すりあに、ハナが話しかけてくる。

『これは夢ではありません。ユーノリア様は、同じ魂を持つ天界人が召喚にに応じてくださったら、禁じ手の魔法を使うとおっしゃっていました。……あ、安心してください。ユーノリア様から頼まれていますから、あなたにも忠義を尽くします』

ハナは丁寧に説明すると、つぶらな黒い瞳でりあを見上げた。

「……夢の中でこれは夢じゃないって言われるなんて、初めてだわ」
りあが思わず呟くと、ハナが困惑したように言う。

『あの……ですから、これは夢ではありません。あなたはユーノリア様と入れ替わったのです』

「そうそう、アバターと入れ替わるっていう変な夢で……え？」

りあは何度か頷いた後、目を大きく見開いた。

「ええ!? 本当に入れ替わったの!？」

仰天するりあの言葉を、エディとハナがそろって肯定した。

『その通りです』

『そうです、夢じゃないですよ。ユーノリアしゃまはちゃんと起きてます。お寝坊さんですけどね』
 「あはははは……って、どうしよう、笑えない。あれ？ でも、感触とかすごいリアル！」
 混乱しながらも頬をつねったり引つ張ったりするりあに、ハナが尋ねてくる。

『私達の新しい主、^{あるし}あなたのお名前はなんでしょう？ なんとお呼びすれば？』

「夕野りあ……だけど」

りあは混乱したまま、とりあえず質問に答える。すると、ハナは驚いた様子で言った。

『魂だけでなく、お名前も同じなのですか？ ではユーノリア様、これからよろしくお願いします』

『よろしくお願いします、ユーノリアしゃま。……ねえ、ハナ。なんで今更挨拶^{あいさつ}してるの？』

『エディったら、主の話をちつとも理解してなかったのね。とにかく、前と同じようにお仕えしてくれればいいから』

『分かった！』

元氣よく返事をしたエディを、ハナは呆れを込めた目で見る。

可愛らしい二匹のやりとりに癒やされたりあは、はいつと右手を挙げた。

「ねえ、質問していいかな。どうやったら元に戻るの？ 入れ替わることができたんだから、元に戻ることもできるんでしょう？」

ようやく動き出したりあの頭が、素晴らしい解決策を導き出した。そう、元に戻ればいいのだ。しかし、ハナとエディはそっと顔を見合わせた。そして、ハナが申し訳なさそうに答える。

『禁じられた魔法のことは、ユーノリア様にしか分かりません。術式の詳細については、私達にも

秘密にしておいでだったので』

『僕にも分かりません！ だってユーノリアしゃまって、すごく頭がよくって、難しいことばっかり言うんですもん！』

エディはあつげらかと答えた。りあは再び頭痛を覚えて、^{ひたひた}額に手を当てる。

そこでふいに、あの鏡の世界でユーノリアから言われた言葉を思い出した。

——覚えてください。あなたは白の書の番人ユーノリア。魔王を封印した呪文を、魔人や魔物から守るのが役目です。

「白の書の番人……。『^{フォースベルグ}spells』でも、魔王を封印した呪文を守る番人のことだったわ」

『ええ、その番人のことです。略して白の番人とも呼ばれています』

ハナがほっとしたように言った。

（なんで？ 白の番人はNPC^{ノンプレイヤーキャラクター}のはず。ユーノリアは、私が作ったアバターなのに……）

本を守る四人の番人は、NPC——つまりプレイヤーが操作するキャラクターではなく、ゲーム会社が作って動かしているキャラクターだ。単なるアバターであるユーノリアが、番人になれるわけがない。

りあは更に混乱してきたが、ふとゲームのストーリーを思い出して青ざめる。

——白の番人は、ゲームではストーリー序盤に登場し、敵キャラの魔人ウィクターに殺される。

そこに駆けつけたプレイヤーが、キーアイテムである白の書を、次の番人に渡すようにと託されるのである。

「よりによって白の番人と入れ替わるなんて、最悪じゃないの……！」

この世界が本当にゲームの世界だとしたら、魔人ヴィクターに殺されるかもしれない。なぜユーノリアが白の番人になっているのかということよりも、自分の身の安全の方が断然気になってきた。りあが頭を抱えていると、左側の通路から靴音がした。ユーノリアの知り合いだろうかと思っ

そちらを見れば、暗闇から一人の青年が現れる。

二十代後半くらいに見える彼は、ゆっくりとこちらに歩み寄ってきた。長い銀髪を一つに束ねており、瞳は赤く、左頬にある青い紋様がとても印象的だ。黒いシルクハットに黒のフロックコート、茶色い革靴に杖。そんな英国紳士のような格好をしており、肩には目玉にコウモリの羽が生えた奇妙な生き物を乗せている。

その姿を見たハナとエディが、りあの前にさつと飛び出した。

「ああ、やはりお目覚めでしたか、白の番人殿。そのような心配がしたので戻ってきたのです。外は吹雪ふぶいていて、ひどく寒いですよ。どこを歩いても景色は変わり映えしないし、退屈で仕方ありませんでした」

うんざりするように言い、青年は溜息を吐く。歓迎すべき客ではなさそうだと感じ、りあは無言で様子見する。

「まさか一週間も眠り続けるとは思いませんでしたよ。あなたが渾身こんしんの力を込めて作った結果は、

さすがの私にも破れません。ずっと目覚めなかったらどうしようかと……」

『うるさいぞ、ヴィクター！ お前なんか、氷漬けになればよかったんだ！』

エディが白い毛を逆立てて青年を睨にらみ、ハナは不安げにりあの傍そばに寄る。

りあはエディの言葉に、飛び上がるほど驚いていた。

(ヴィクターですって!?)

ゲームの3D映像を思い浮かべて、目の前の青年と比較する。正直に言って、生身のヴィクターの方がずっと綺麗な外見をしていたので、全く気付かなかった。だが、氷のように冷たい瞳はゲームと同じだ。

彼は白い手袋をはめた右手を、すつと差し出してくる。

「さあ。いい加減、諦めて白の書を渡しなさい」

「ええと……。ねえ、どうしたらいい？」

りあが小声で尋ねると、ハナは頭をぶんぶんと横に振った。

『絶対に渡してはいけません！ 殺されてしまいますよ！』

やはり、ヴィクターはここでも悪役のようである。

「わ、分かった。ところで……白の書ってどこにあるの？」

りあはヴィクターに注意を払いながら、白の書を探して周りを見回す。だが、あるのは杖と籠かごバッグだけで、本など一つも見当たらない。

ヴィクターは鳩が豆鉄砲を食らったような顔で、首をわずかに傾げる。

「本のありかを知らないなんて……まさか、本当に禁じ手の魔法を成功させたんですか？ さすがは稀代の天才魔法使い。いやあ、人間にはたびたび驚かされますよ。時に、その何倍も生きる魔人にも為せないことを為してしまう」

愉快そうに言って、ヴィクターは洞窟内をじつくりと眺め回した。

「……なるほど。ようやく分かりましたよ。自然の魔力ラインを利用して、魔法陣に魔力を呼び込む術式ですね。これは面白い」

『いけない！ ユーノリア様、走ってください！ あっちの道です！』

「え？ え？」

ハナはりの耳元で叫ぶと、四方を囲む石の一つに体当たりした。

その瞬間、ガラスの割れるような澄んだ音が洞窟内にこだまする。

「ぐあっ」

ヴィクターが見えない力に弾き飛ばされ、洞窟の壁に背中から激突した。

直後、洞窟全体がぐらぐらと揺れ始める。

『今のうちに逃げましょう！ 荷物も持って！』

『早く逃げなきゃ潰されちゃう！』

「ええっ、嘘でしょっ!？」

ハナとエディに急かされるまま、りあは白い杖と籠バッグを引っ掴み、右側の通路へと走った。天井から細かい石片が落ちてくる。このままでは洞窟の崩落に巻き込まれて死んでしまうかもし

れない。強い恐怖を覚え、りあは必死に外へ飛び出した。

そこは一面、真っ白な世界だった。

驚いて足を止めた瞬間、横から突風が吹きつけてきて、りあは思わずよろめく。

「さむっ」

洞窟の外は激しく吹雪いていたが、それどころではなかった。背後の洞窟が、ピシピシと嫌な音を立てている。

『早く走って！』

『洞窟から離れて、ユーノリアしゃまっ。巻き込まれるっ』

ハナとエディが叫びながら先導し、りあは慌てて二匹を追いかける。

「いやあああっ」

めちやくちゃんに手足を動かして走っていたら、後ろでドーンと雷が落ちるような音がした。洞窟が崩れたのだろう。

爆風にあおられ、りあは派手に転ぶ。

「きゃあっ！ 痛っ……やだ、これって本当に現実なんだ……」

転んだ拍子に、雪の下にあった岩に膝を打ちつけたようだ。血は出ていないが、あまりの痛みに、りあは涙目になる。

夢みたいな話だが、今りあはゲームの世界にいるらしい。いや、ゲームとは違う展開が起きているから、ゲームに似た世界と言うべきだろうか。

りあは地面に座り込んだまま、後ろを振り返ってみる。さっきまでいた洞窟の辺りに、もうもうと土煙が立っていた。

その視界にハナが割り込んできて、心配そうに尋ねてくる。

『ユーノリア様、大丈夫ですか？ あれは前のユーノリア様が仕掛けた罠です。あの方は魔人ヴィクターにずっと付け狙われていて……入れ替わりの儀式の間に、白の書を奪われては困ると言って、強力な魔法陣を仕掛けていらしたのですよ』

「私が魔法陣を出たから、洞窟が崩れたってこと？」

『いえ、洞窟が崩れたのは、私が青い石を倒したからです。あの魔人が潰されて死んでいれば幸いなのですが……あいつはしぶといから、きっと生きてます。早くここを離れましょう』

「あなた達、結構容赦ないのね」

りあは恐れおののきながらも、ハナの言葉に頷く。ヴィクターが危険人物なのは、ゲームでよく知っている。

膝の痛みを我慢して立ち上がったりあは、とにかくこの場を離れることにした。吹雪の中、なるべく平坦な面を選んで歩き出す。

ハナがその傍らを飛びながら、小さな前足を使って説明してくれる。

『ここはホワイトローズ・マウンテン。そして、あそこに見えるのがカノンという町です。魔人や魔物は町には入れませんから、ひとまずあそこまで逃げれば安心ですよ』

「ホワイトローズ・マウンテン……」

りあはハナの言葉を繰り返した。

奇しくもユーノリアと入れ替わる直前のりあが、素材集めをしていた場所だ。一年中雪が吹きさび、凍てついた風が薔薇のトゲのように肌を刺すため、そんな名前がつけられている。

慣れない雪道を慎重に下りながら、りあは山裾に広がる針葉樹の森を眺めた。遠くにある三角屋根の家が集まっている場所、そこがカノンの町らしい。

相変わらずわけが分からなかったものの、りあは少しほっとした。町に行けば人がいるから助けを求められるし、食べ物や寝る場所なども確保できるだろう。

目的地が見えているせいか、だんだんと駆け足になってしまう。そのまま順調に山道を下つていたりあだが、やがて前方の岩の上に人影を見つけた。

「そんなに急がなくてもよろしいのに」

「ヴィクター……！」

ハナの予想通り、彼は生きていたようだ。しかも、先回りするだけの余裕があったらしい。驚いて立ち止まったりあに、ヴィクターは再び右手を差し出してくる。

「あなたのことも興味深いのですが、それより大事ななのは白の書です。さっさとよこしなさい」「えっ」

りあが瞬きした次の瞬間、ヴィクターはすぐ目の前に立っていた。彼女が何か言う前に、白い手袋をはめた手で首を掴まれる。

「大人しく白の書を渡せば、命は助けて差し上げますよ？」

「うう……っ」

ヴィクターの右手がギリギリと首を締めてくる。そのまま持ち上げられ、りあの踵^{かかと}が宙に浮いた。
『ユーノリアしゃまっ』

『ユーノリア様っ』

エディとハナが叫んでヴィクターに飛びかかった。しかし、ハナは目玉の使い魔に跳ね飛ばされ、エディはヴィクターの手によって払い落とされる。

ひどく息苦しくて、りあの視界が霞^{かすみ}む。思わずヴィクターの右手を両手^{つぎ}で掴んだが、どうやっても外れそうにない。

（なんで私がこんな目にっ）

そこでふと、りあはゲームの操作方法を思い出した。ここがゲームと同じような世界なら、きっと魔法も使えるはずだ。

だが、今はウインドウなんて見えないし、キーボードもなかった。りあは半ば^{なか}ヤケクソで、右手の指を一本立てる。

（F1キー……小規模爆発魔法！）

——ドオンッ！

辺りに轟音^{ごうおん}が鳴り響いた。

「くっ……！」

ヴィクターの手が外れ、りあは爆風に吹き飛ばされる。その体は山道を外れ、空へと放り出された。

「きゃあああ」

悲鳴を上げながら、りあは針葉樹の森へと真つ逆さまに落ちていく。白くけふる灰色の空を見たのを最後に、りあの意識はふつりと途切れた。



「ここには初め、何もなかった。そこに神は、美しき青い宝玉を入れて世界を作った。その世界アズルガイアには人や妖精族が生まれ、平和に暮らしていたが、宝玉に含まれていた小さな不純物から魔王が生まれ、その配下である魔人や魔物が人々を苦しめている」

雪山の斜面を登りながら、青年は歌うように呟^{つぶや}いた。息を吐き出すたびに、目の前の空気が白く染まる。

青年——レクスは背が高く、紺色の防寒着姿が様^{さま}になっている。大剣を背負って山を登る様子は、険しい崖^{がけ}に棲息^{せいそく}するカベヤギ並みに軽快だ。

目元はオレンジのゴーグルで覆^{おほ}われ、耳当て付きの帽子の下からは茶色い髪が覗いている。首や耳につけた銀製のアクセサリーが、きらりと光を放っていた。

静かで冷たい雰囲気を持つ彼には、雪山がよく似合う。

「どうせ世界を作るなら、不純物のない宝玉を使えばよかったのに。そう思うだろ？ ラピス」
「またですか？ 王子。イライラすると、すぐ創世神話にケチつけますよね」

レクスの後ろを歩くケット・シーの青年——ラピスは呆れたように言った。レクスの胸くらいの身長しかない彼は、青い宝石がはめられた白木作りの杖に、全体重を預けて息を吐く。

手と足先だけが白く、他はふかふかした青い毛で覆われているにもかかわらず、毛糸の帽子や毛織のマントを身につけ、白いマフラーをぐるぐると首に巻いていた。

レクスは足を止め、猫の姿をした従者を赤茶色の目で睨む。

「王子はやめろと言ってるだろ。これで何回目だ」

「申し訳ありません。ですがボクからすれば、王子は王子なので。だって、こんなに小さい頃からお傍にいるんですよ？」

ラピスが手で小ささを表現すると、レクスは鼻で笑った。

「五番目の王子など、いてもいなくても同じだろ。だから王子なんて呼ばなくていい」

「まあ、世間じゃ『幻の王子』と呼ばれたり、実は死んでるんじゃないかと囁かれていますけどね。それは王子が——いえ、レクス殿が悪いんですよ。十六の時に城を出て以来、たまに思い出したように里帰りするだけなんですから。誰も想像していないでしょうね、まさか王子が冒険者になって、しかもSランクに到達してるだなんて！」

ラピスはそう言って、「にやしし」と笑う。

「カノンの町の皆だって、驚くと思いますよ。あの『竜殺しのレクス』が、実は王子だなんて知っ

たら！」

「……ばらすなよ」

「はーい」

しっかりと釘を刺されたラピスは、不満げに返事をした。

「レクス殿はただの剣術馬鹿のふりをしてますけど、ボクはちゃんと分かっているんですよ。本当はお兄さんを助けるためなんだって！ 各地を回ってお城に情報を送りながら、魔物を倒して治安維持……実に涙ぐましい話です。ううう、ボク、涙で目の前が見えなくなってきました」

「泣くなよ、鬱陶しい」

レクスが嫌そうに言ってみせても、ラピスは気にした様子もなく鼻をズズツとする。

「ああ、本当に寒いですね、ここ。涙と鼻水が凍っちゃいましたよ。やだなあ」

ラピスは面倒くさそうに呟くと、金色の目で周りを見回した。

「ところでレクス殿。本当に、こんなところに魔人がいるんですか？ 例の目撃情報、怪しすぎると思うんですよ。だって人っ子一人いやしませんよ。ガセだったんじゃないですか？」

レクスも周囲に目を向けた。ホワイトローズ・マウンテンの中腹であるここは、眼下には雪が積もった灰色の岩肌が、その向こうには針葉樹の森が見える。更に遠くには、カノンの町の時計塔がうつすらと見えていた。

「確かに辺鄙なところだが、人や魔人がいてもおかしくはない」

「なんでそう言えるんです？」

「現に、俺とお前がここにいるだろ」

「……」

ラピスはあからさまに苦い表情をした。

「ボクはレクス殿の付き添いでもなきや、こんな寒いところには来ませんよ。家でゴロゴロしています。あ、言うのを忘れてましたが、危険手当はたっぷりお願いしますね」

今度はレクスが渋面を作る番だった。

「がめつい奴だな。嫌ならついてこなくていい」

「冷たい殿下。レクス殿の従者が務まるのは、アズルガイア中を探しても、ボクくらいなものですよ？ ドラゴンの巣穴に、ヒドラの棲む火山……あなたについていて、まともなところに行けたためしがありません。今日もほら、こんな雪山ですしね！」

「帰っていいぞ」

すげなく言って、レクスはさっさと歩き出した。ラピスはその後を必死に追う。

「帰りたいですけど、帰れないんですよ！ レクス殿を放って帰ったら、母さんにどやされます。

お優しい王妃様と違って、ボクの母さんはドラゴンより……いや、荒地の魔王よりおつかないんです」

「そうかそうか、大変だな」

完全に他人事なレクスの背中を、ラピスは恨みがましく見つめた。だが、レクスはその視線を平然と受け流す。

「俺だって、好きでこんなところに来ていているわけじゃない。ここにはホワイトドラゴンの姿をした

大精霊が住んでいるという伝説があるくらいで、狩りがいのある魔物もないしな。だが、魔人ヴァイクターを見かけたという噂があるなら別だ」

「……レクス殿をここまで怒らせるなんて、あの魔人も余計な真似を。おかげでボクまでこんな目に遭うんですから。ああ、寒い」

大袈裟に身震いするラピス。レクスは呆れ顔で溜息を吐いた。

「なあ、ラピス。俺はいつも不思議に思ってたんだが、立派な毛皮があるのに、なんでそんなに着込むんだ？ マフラーなんてするだけ無駄だろ」

「寒がりなんです！ もう、猫扱いしないでくださいよ。ボクは猫じゃなくてケット・シーですって、小さい頃から何度も言ってるでしょう？」

まったく、とぼやくラピスに、レクスは苦笑する。そう言われても、レクスには羽が生えた猫にしか見えないのだから仕方ない。

それより魔人を探さねばと思い出したレクスは、意識を切り替え、雪を踏みしめながら山道を歩く。その時、遠くから轟音が響いてきた。

「やばいですよ、レクス殿。雪崩かもしれません！」

「ああ、そうだな」

「そう言いながら、なんでまだ登ってるんですか？」

「雪崩ぐらいじゃ死なないから平気だ」

「ボクは平気じゃありません！」

戻ろう逃げようとわめくラピス。それを無視して山道を歩くレクスの耳に、今度は爆発音が届いた。続いて女の悲鳴も聞こえてくる。

——真上だ。

はっとして上を向くと、灰色の髪を持った女が針葉樹の森へと放り出されたのが見えた。その体はこちらの方へ落ちてくる。

レクスはとっさに高く跳躍し、空中で女を受け止めた。

背中からまっすぐ森へと落ちていく中で、山道の端からこちらを見下ろす男と目が合った。

『王子——っ！』

ラピスの叫び声を聞きながら、レクスは下の状況を確認する。そして騎士の固有スキルである「ミラーシールド」を使った。これは一日に一度だけ、物理攻撃によるダメージをゼロにできる。

そのまま雪の積もる地面に背中から落ちたが、スキルのおかげでダメージは受けずに済んだ。先ほど、雪崩くらいじゃ死なないと言ったのも、このスキルがあるからだ。

レクスは女を抱えたまま起き上がり、もう一度山道を見上げる。だが、そこにいた男の姿はすでになく、物寂しい風音が聞こえるばかりだった。

二章 始まりの町カノン

パンの焼ける香ばしいにおいに誘われ、りあの意識はまだろみからふっと浮かび上がった。

目を開けると、木でできた天井が見える。視界の端で白いカーテンが揺れていた。

(……どこ？　ここ)

寝ていたベッドの上で、ゆっくりと上体を起こす。白い花卉が窓からひらりと舞い込んできて、掛け布団の上に落ちた。りあは指先で花卉をそっと摘み上げる。

近くに桜の木でもあるのかと思いい、窓から外を見た。すると、見慣れぬ三角屋根の向こうに広がる青空に、島が浮いていた。花卉はそこから降ってくるようだ。

本来なら驚くべき光景だが、寝ぼけているりあは、綺麗だなあとぼんやり考える。

『ユーノリア様——っ！』

『しゃま——っ！』

そんな声とともに、もふもふしたものが顔に張りついてきた。

「何!？」

りあはぎょっとして、それらを掴んで引きはがす。すると、羽の生えたハリネズミとフェレットが目をつるうるさせて、りあを見上げていた。

「あ……っ」

気を失う前のことを思い出し、りあは改めて部屋を見回す。ちんまりとした木造の部屋には、アンティークっぽくて可愛い雰囲気の家具が置かれている。どう見ても、りあのアパートではない。

もう一度窓の外を見てみると、浮島から花卉が降ってくるという不思議な光景がそこにあった。

「そうだった。私、『4spells』のアバターと入れ替わって……」

りあは、さあつと青ざめた。チェストの上に置かれた鏡に、急いで駆け寄る。

「うっそお……」

鏡に映る姿は、アバターのユーノリアそのものだった。

「本当に入れ替わったの？ わあ、人形みたい。綺麗……」

りあは頬や髪にべたべたと触れてみる。ユーノリアは神々しいくらいの美人なので、すぐにでもモデルか女優に転職できそうだ。雪のように真っ白な肌は滑らかで、爪の先まで整っている。華色の目は神秘的だし、灰色の髪は緩やかに波打っていて気品が感じられた。

だが、口を閉じて無表情になると、機嫌が悪そうに見える。綺麗すぎる人が無表情だと少し怖いだなんて、りあは初めて知った。

「美人も大変なのね」

そんな能天気な感想を吐いた後、りあは自分の着ている服を見下ろす。綿のネグリジェは似合っているが、ちょっとサイズが大きい。誰が着せてくれたのだろうと考えていると、宝石精霊達が両

肩に飛びついてきた。

『急に起き上がって大丈夫なんですか？ ユーノリア様ったら、あれから丸一日眠っていらしたんですよ。ハナ、とっても心配しました！』

『あの魔人は近くにいませんから、安心してくださいね、ユーノリアさま』

「……そっか、町には結界があつて、魔人や魔物はいれないものね。体は大丈夫よ、ありがとう」りあがお礼を言うと、二匹は嬉しそうに飛び上がり、小さな前足でハイタッチをした。なんとも癒やされる光景である。

「ところで、あれから何があつたの？」

『ユーノリア様が崖下に落ちたところを、通りかかった冒険者の方が助けてくださったんです。おかげで無事にカノンの町まで来ることができました』

ハナの説明を聞いて、りあは首を傾げる。

「冒険者？」

そこで、部屋の扉をノックする音が響いた。

「は、はいっ」

りあが返事をする、ふくやかな中年女性が部屋に入ってきた。

茶色い髪をひつつめて束ね、三角巾でまとめている。赤色のエプロンをつけている姿は、面倒見のいい近所のおばさんといった雰囲気だ。

「ああ、やっと目が覚めたんだね！ 昨日からずっと寝たままだったから心配してたんだよ。うん、

顔色もずいぶんよくなったね」

「あの、あなたは……？」

顔を覗き込んでくる女性に、りあはおずおずと尋ねた。

「私はマリア・ガイス。この宿のおかみさ。昨日はびっくりしたよ。あの女嫌いの旦那が、あんたを腕に抱えて帰ってきたんだから。なんて堂々としたお持ち帰りだろうと思ったら、ただの人の助けだったというじゃないか。あの人らしいってならぬねえ」

やれやれと大袈裟に溜息を吐くと、マリアは扉の方へ向かう。

「ちょいと待ってておくれ、旦那を呼んでくるから。あ、その寝間着は私のだよ。着替えさせたのも私だから、安心しなね！」

「はあ」

叫ぶように言いながら廊下へ消えたマリアに、りあは気の抜けた返事をする。いったい旦那とは誰のことだろうと首をひねっていると、すぐにマリアが戻ってきた。その後ろには、二十代半ばくらいの背の高い青年がいる。

マリアに背中を押された青年は、部屋へ入ってたたらを踏んだ。そして迷惑そうにマリアを睨んだ後、こちらにやってくる。

彼が傍に来ると、りあは少し威圧感を覚えた。背が高いので見上げなくてはいけないというものがあるが、それ以上に彼の持つ冷たい雰囲気の方が怖い。

(格好いい人だけど、なんだか不良っぽくて怖いなあ)

灰色の服に身を包んだ青年は、短い茶色の髪をしていて、耳や首には銀製のアクセサリをじゃらじゃらとつけている。赤茶色の目が、じろりとりあを見下ろしていた。

「やっと起きたか。俺はレクス、冒険者だ。今はこの町の冒険者ギルドで教官をしている。ついでに言うと、山から落っこちてきたあんたを拾った」

「はあ……」

淡々とした自己紹介に、寝起きで頭が回らないりあは、とりあえず頷いた。すると戸口から、青毛の猫が顔を覗かせる。

「レクス殿、体の具合くらい聞いてあげてくださいよつ。彼女、びっくりしてるじゃないですか……あ、申し遅れました。ボクはラピスといって、レクス殿の従者をしています」

「従者……」

りあはラピスの姿に目を奪われながら、呆然と口にした。手と足の先だけ白い青猫が、ゲームに出てくる精霊教という宗教の神官服である白いローブを着ている。その背中には、トンボに似た羽が一对生えていた。身長がレクスの胸くらいまでしかないのに、まるで子どもが着ぐるみを着ているかのように見える。

りあはふと、ゲーム『^{「アースペルズ」}Spells』の設定を思い出した。

ゲームの舞台であるアズルガイアという世界では、人間と妖精族が共生している。妖精族には猫・犬・木・魚の四種類があり、それぞれケット・シー、クー・シー、ドリアド、人魚と呼ばれていた。プレイヤーがアバターを作る際は、人間を含めた五つの種族から選ぶことができたのだ。

ラピスはその中の一つであるケット・シー、つまり猫の妖精だろう。

「すごい……。本物？」

好奇心に駆られたりあは、ラピスの耳を引っ張ってみる。すると、柔らかくてふわふわしていた。

「痛い！ 触らないでください！」

「あ、ごめんなさい！」

りあはすぐに手を離して謝った。ラピスはりあから少し距離を取り、ぶつぶつと文句を言う。

「まったくもう、失礼なお嬢さんですねっ。あなただつて初対面の方に耳を触られたら、いい気はしないでしょう？」

「本当にごめんなさい！ もうしませんからっ」

りあがべこべこと頭を下げて謝ると、ラピスはようやく怒りを静めた。その頃合いを見計らったようにレクスが尋ねてくる。

「で？ あんたは？」

「私は夕野……いえ、ユーノリアといいます。助けてくださってありがとうございました」

りあはユーノリアと名乗った。発音が違うだけで文字の並びは本名と同じだし、ネットで使うハンドルネームのようなものだと思います、特に抵抗はない。

丁寧な頭を下げてから体を起こすと、レクスが疑いを込めた目でこちらを見ていた。あまりにじろじろ見てくるので、りあは心持ちのけぞりながら問いかける。

「な、何か？」

「あんた、まさか魔人じゃないかな？」

「……は？」

一瞬、質問の意味が分からず、りあは目を点にする。

「ええと……魔人ってあれですよ？ 人型の魔物のことですよ？」

魔人は頭に角が生えているか、もしくは顔に青い紋様があるから一目で分かる。それらの特徴を隠してただの人間に化けることもあるが、そんなことが出来る魔人はめったにいない上に、ダンジョンから出てくることも稀^{まれ}なはずだ。それともこの世界はゲームと違い、人間に化けた魔人がそこら中にいるのだろうか。

「あー、なんでもないです！ 今の質問は忘れてください！ すみませんね、お嬢さん。レクス殿、もう少し自重^{じじよう}してくださいよっ」

ラピスが誤魔化すように笑いながら、レクスの腕を引っ張った。

レクスはむっとした様子で反論する。

「だがラピス。あんな雪山に、こんな女が一人でいるなんて怪しいだろ」

「山から落ちて死にかけてたんですよ？ そんな間抜けな魔人がいますか！」

「それもそうだな」

ラピスの言葉に頷くと、レクスは再びりあに向き直った。

「あんた、あんなところで何してたんだ？」

「ええと……分かりません。気付いたらあそこにいる……」

ユーノリアと入れ替わったと思ったら、あそこに倒れていたのだ。それに、本物のユーノリアが禁じ手の魔法に手を出したなんて言えば、どんなことになるか分からない。

りあが困ってうつむくと、レクスは更に質問してきた。

「崖がけの上にもう一人いたようだが、あいつは誰だ？」

「崖の上にいた人……？ 見たんですか？」

りあはヴィクターのことを思い出し、若干身を乗り出して尋ねた。小規模魔法とはいえ、あれほどの至近距離で爆発を起こしたのだ。ヴィクターも無事では済まなかっただろうが、念のため結果を確認しておきたかった。

「いや、顔までは見えなかった。すぐにいなくなったからな」

「そうですか」

りあは、ほっとした。ヴィクターが追いかけてこなかったということは、少なからずダメージがあったことだろう。そこで宝石精霊のエディが口を開く。

『あいつ、本当にしぶといで……むぐぐつ』

「エディ、ちよつと静かにしてなさい」

りあは慌ててエディの口を塞ふさいだ。ヴィクターのことを誰かに話すのはよくない気がする。少なくとも、ゲームの中の彼は悪辣あくろう非道ひどうだった。ここで迂闊うがくに話して、助けてくれた人を危険な目に遭わせるわけにはいかない。

「で？ あいつは誰なんだ？」

「私自身もよく分かっていないことを誰かに話すのは、気が引けます」

「つまり、俺達には何も話せないと？」

「……すみません」

よく分かっているのは本当だ。だから、りあは深々と頭を下げて、これ以上追及されないように祈る。

「ふーん……」

少し和らいでいたレクスの目が、怪しいものを見るような目に戻った。りあは首をすくめて縮こまる。そこで、マリアが耐え切れないとばかりに嘖いき出した。

「あはは、レクスの旦那、そうしていると虐いじめてるようにしか見えないよ。よく覚えてないんじや仕方ないだろう。倒れたショックのせいかもしれないし、しばらくゆっくりしてたら、そのうち思い出すよ」

「そうですね、レクス殿。今のあなたは完全に、善良な市民を追い詰めるチンピラです。その辺でやめておいた方が無難ですよ」

「うるさいぞ、ラピス。お前はほんとうに一言多いな！」

レクスがじろりとラピスを睨にらんだ。だが、ラピスの方はどこ吹く風といった感じである。これ以上言っても無駄だと思ったのか、レクスは再び険のある眼差しをりあに向けた。

「なんだか知らないが、あんたは怪しい。だから、しばらく俺の監視下にいてもらう。少しでも妙な真似をしたら衛兵に突き出してやるからな。しっかり覚えておけ」

「は、はいっ」

涙目でこくこくと頷くりあを、マリアとラピスが同情的な目で見ている。だが、それも気にすることなくレクスは平然と尋ねてきた。

「ところであんた、金は？」

「えっ？ ……まさか、助けてやったんだから有り金を全部よこせとか、そういうことですか？」
だとしたら、なんて恐ろしい人だろう。親切なふりをして金銭を要求するだなんて、正真正銘のチンピラではないか。

りあが青ざめながらぶるぶる震えていると、またラピスが間に入ってきた。

「もう、レクス殿っ。なんでそういう聞き方しかできないんですか？ どう考えたって悪者の台詞ですよ、それ」

「何言ってるんだ。ただ金を持つてるのかどうか聞いただけだろ」

不機嫌そうに返すレクスに、ラピスは溜息を吐いた。そして、諦めた様子でりあに頭を下げる。

「申し訳ありません、お嬢さん。この方は、宿代を払えるのかどうかを聞いているだけなんです」

「あ……宿代」

現実的な問題にぶち当たり、りあは冷や汗をかいた。

（ゲームだと、画面の上の方にコインの枚数が表示されてたけど……ここにはそんなの見当たらない。だいたい、お金を持ってたとしても、どうやって使うんだろう）

ゲーム内の通貨はデイル銀貨というものだったが、この世界の通貨もそれと同じなのだろうか。

りあが困っていると、エディが籠バッグを運んできた。

『ユーノリアさま、お財布はここですよ』

「あ、ありがとう、エディ」

りあはお礼を言つて籠バッグを受け取る。

（なんだ、お金はバッグの中にあるのね。……あれ？）

籠バッグの中を覗いたが、完全に空だった。その代わり、内側に魔法陣らしきものが刺繍されている。りあが固まっていると、レクスが籠バッグを覗き込み、怪訝そうに聞いてきた。

「防犯魔法付きのバッグか。こんな高価なものを持つてるなんて……あんた、そこそこの名知れた冒険者か？ それとも貴族か？」

興味津々な様子でバッグに触れようとするレクスの腕に、ラピスが飛びついて止めた。

「レクス殿！ いくら怪しいからって、他人のバッグに触っちゃ駄目ですよ。マナー違反ですし、もし防犯魔法が発動したら怪我しちゃいますよっ」

「え、これって危ないんですか？」

りあはびつくりして、恐る恐る籠バッグを見下ろす。

すると、今度はラピスが怪訝な顔をした。

「持ち主は安全ですよ。防犯魔法っていうのは、あくまで盗難防止のためのものなので……。やっぱりこの方、シヨックで記憶が飛んでるんじゃないですか？ レクス殿」

その言葉を聞くに、防犯魔法というのは、この世界では一般常識のようだ。苦笑いを浮かべる

あに、ハナが丁寧に説明してくれる。

『ユーノリア様。籠^{かご}バッグの中に手を入れて、アイテムの名前を口にするか、もしくは思い浮かべてください。そうすると、手を引き出した時にアイテムが出現します』

(つまり、この籠バッグって、インベントリみたいなものなのかしら?)

インベントリというのは、ゲーム内におけるアイテム入れのことだ。『^{フォーセプス}spells』の初期設定では五十個までしか入れられず、それ以上のアイテムを持ち運びたければ、課金して容量を増やすしかない。

「なるほど、分かったわ。えっと、お財布お財布……」

りあが籠バッグに手を入れると、水に浸^{ひた}かったような不思議な感じがした。次の瞬間、りあの前に四角いウインドウが浮かび上がり、アイテムリストが表示される。

白の書、財布、回復アイテム……それ以外にもモンスターがドロップしたと思^{おも}ひきものがいくつか入っているが、アイテムの数はそう多くはない。だが財布の他に、化粧品セットと着替えも入っているところがゲームと違っていた。

「このリストに書かれたものが入っているのよね?」

『リスト……ですか?』

「これよ、ここに浮いてるやつ」

『ハナには見えませんか? うーん、もしかして本当に打ちどころが悪かったんでしょうか……』ハナはおろおろしていたが、はっと気付いたように言う。

『お、お医者さんっ』

慌ててどこかに飛んできこうとするハナを、りあは急いで止めた。

「待って! 大丈夫だから落ち着いて。……ごめんね。変なこと言っちゃって」

どうやらこのウインドウは、りあにしか見えていないらしい。その証拠に、りあ達の会話を聞いたレクスとラピスが、やばいなという顔で囁^{ささや}き合っている。

(理由は謎だけど、私には他の人達と違うことができるみたい。変に思われないよう、気を付けなきゃ……)

頭がおかしいと思われて、病院などに閉じ込められては困る。りあは平静を装^{よそお}いつつ、籠バッグから財布を取り出した。

財布は革製の巾着袋^{きんちやくぶくろ}で、中に入っていたのは10デイル銀貨一枚だけだった。日本円に換算するなら、だいたい千円くらいだと思う。

固まるりあの様子を不審に思ったのか、ハナが財布を横から覗き込んでくる。

『……そういえばユーノリア様、この間、そちらの杖を買ったばかりでしたね』

ハナが目線で示した方向には、いかにも高そうな白い杖が置かれていた。

ゲームでは魔物を倒すと、魔虹石^{まこうせき}と呼ばれるアイテムをドロップするので、それを売ればお金が手に入る。だが、ここでも同じかどうかは分からないし、同じだったとしても、すぐにはどうこうできない。

「え……と」

りあが困惑していると、今度はラピスが財布の中を覗き込んだ。そして恐る恐る尋ねてくる。
「まさかとは思いますが、これが全財産ですか？」

りあは無言で頷いた。そのままうなだれるりあから視線を逸らし、ラピスはレクスに言う。
「10デイルしか持っておられないそうです」

「は？ いったいどんな生活してるんだ、あんた……」

「……分かりません」

もうヤケだ。こうなったら全部分からないで通すしかない。

（ユーノリアの馬鹿一っ。入れ替わるなら、私のこともちよつとは考えといてよ！）

心の中でユーノリアに向かって叫びながらも、実際には黙ってうつむくしかない。レクスの視線がチクチクと突き刺さってきて痛かった。

だが意外なことに、彼はりあを責めることなく、仕方ないなとばかりに肩をすくめる。

「じゃあ、一週間だけ面倒を見てやる。食費を含めて宿代は全部俺が出すから、その後のことは自分でどうにかしろ」

「ええっ!? いいんですか!? な、何か裏があるんじゃない……?」

「あんたを助けると決めたのは俺なんだから、ある程度は面倒を見るべきだろう」

至極当然だといわんばかりのレクスに驚き、りあはラピスの方を見る。するとラピスも頷いた。

「そうですね、自分で拾ってきたなら責任を持って面倒見ないと」

犬猫を拾うみたいな言い方が少し気になったものの、りあはその言葉に納得する。現金かもしれ

ないが、レクスの印象も一気変わった。

（なんだ。怖い人かと思ってたら、案外いい人じゃない……!）

当面の生活が保障されたことで、りあはほっと息を吐く。だが、それも束の間、レクスが怖い顔で凄んできた。

「面倒は見てやるが、もし勝手に逃げたりしたら……どうなるか分かってるな？」

「え、ええ、分かってます！」

りあはしゃきんと背筋を伸ばして返事をする。一瞬、大剣で斬り殺される幻覚が見えた。

（つまり、監視する代わりに宿代を払ってくれるってことなのね……）

レクスの視線から身を守るように、りあが縮こまっていると、ラピスがいい加減にしろとばかりに目を吊り上げた。

「レクス殿、どれだけ怖がらせたら気が済むんですか！ やめてくださいよ、これじゃ従者のボク

まで悪者扱いされるでしょ！」

主人に文句を言った後、ラピスは申し訳なさそうな顔でりあに忠告する。

「でも、お嬢さん、変な真似はしない方がいいです。この方はSランク冒険者ですから、逃げるなんて無理ですよ。下手なことをしたら、そのまま牢屋に放り込まれちゃいます」

「Sランク……冒険者!？」

レクスがSランクということではなく、冒険者という単語にりあは食いついた。

「そうだわ、冒険者よ！」

ゲームと同じなら、冒険者ギルドのクエストを達成することで報酬^{ほうしゅう}がもらえる。

ちなみに冒険者のランクは上からSS、S、A、B、C、Dと六段階ある。プレイヤーのレベルとは関係なく、クエストを達成することでしかランクは上げられないので、ゲームでは地道な努力が必要だった。すでにレベルがカンストしているりあでも、まだAランクだったのだ。

「私、冒険者になります！ それで、ちゃんとお金は返しますからっ」

りあが勢い込んで言うと、マリアが口を挟んできた。

「ちよっとお待ちよ、お嬢さん。そんな細っこいあんたが冒険者になるって？ 冒険には危険が付き物なんだ。あんたみたいなのは、すぐ魔物に殺されちゃうよ」

その言葉に、りあはひるんだ。お金を稼ぐことで頭がいっぱいで、そこまでは考えていなかったのだ。

エディが聞き捨てならないとばかりにマリアに反論する。

『ユーノリアしゃまは、すつごく強い魔法使いなんですよっ。魔物なんて、バンバンドン！ つて倒しちゃいますから大丈夫ですっ』

「そ、そうなのかい？」

エディの勢いに気圧^{けお}された様子で、マリアが聞き返した。それにラピスが納得顔で答える。

「まあ、それくらいの戦闘能力がなければ、ホワイトローズ・マウンテンなんかに入らないでしょう」

「従者さんがそう言うなら安心だね。だったら私も止めないよ」

にかつと笑うマリアに、りあは会釈^{えしやく}をした。

「心配してください、ありがとうございます」

「あはは。こんな丁寧な冒険者はめったにいないから、やっぱり変な感じだけどねえ」

苦笑するマリアにあいまいな笑いを返しながら、りあは密かに決意を固める。

（魔物は怖いけど、戦わなきゃお金が稼げないんだもの。背に腹は代えられないわっ）

今のりあがすべきなのは、当面の生活資金を稼ぐことだろう。何より、りあはこの世界のことを全く分らないのだ。情報を集めるためにも、しばらくカノンの町で生活する必要がある。

それに、再びユーノリアと入れ替わる方法を探すにしろ、魔人ヴィクターについての情報を手に入れるにしろ、冒険者ギルドに登録しておいた方がよさそうに思えた。

我ながらいい案だとりあが頷いていると、レクスがずいど身を乗り出してきた。彼は人差し指をりあの顔に突きつけて、きっぱりと言う。

「あんたが冒険者になろうがどうしようが勝手だが、俺の監視対象であることに変わりはない。それだけは肝^{めい}に銘^{めい}じておけ」

「は、はいっ」

りあが慌てて返事をする、レクスは「よし」と頷いて、さっさと部屋を出ていった。ラピスも「ごめんや」とりあに会釈^{えしやく}してから、レクスの後を追う。

部屋に残ったのは、苦い顔をしたマリアだけだった。

「ごめんねえ、ユーノリアちゃん。ああ見えて結構いい人だから、恨まないでやってね」

「恨むなんてとんでもない！ 助けてくださった上に、宿代まで出してくださるなんて、親切じゃ

ないですか。……正直、ちょっと怖いですけど」

りあがうつかり本音を漏らすと、マリアは愉快そうに笑った。

「あつはっは。……そうだ、別の服を持つてくるから、それに着替えちゃいなよ。あんたの着てた服、ちよつとおつてたからさ、勝手に洗っちゃったんだよ」

「におっ……は、はい、ありがとうございます。よろしく願います」

洞窟で一週間も寝ていたというから、におつていて当然なのかもしれない。マリアの厚意はありがたいが、女子として少し悲しくなってしまうりあだった。



りあはマリアが若い頃に着ていたという服に着替えた。萌黄色のワンピースは、ヨーロッパのどこかの国の民族衣装に似ている。

「わあ、これもすごく似合う。ユーノリアって本当に美人だものね」

鏡を覗き込んだりあは、感心して呟いた。何を着ても似合うなんてうらやましい。

「あ、そうだ」

ふとあることを思いついたりあは、籠バッグを手に取ると、ベッドの端に座る。その傍らに、宝石精霊達が着地した。

『どうしたんですか？』

ハナの問いに、りあは籠バッグに手を差し入れながら答える。

「白の書つて、どんなものなのかと思つて」

アイテム名を呟きながら手を引き抜くと、膝の上に白い本が落ちた。両手で持つてみれば、結構ずつしりしている。独特の紋様がある革表紙には石が埋め込まれていて、淡く光っていた。

思い切つて開いてみると、最初のページに誰かからのメッセージらしきものが書かれていた。かなり古めかしい言い回しなので、理解しやすくなるよう、りあは声に出して読む。

「我が意志を継ぎ、魔王の封印を守る者へ。」

汝、本を手放すにあらず。

汝以外、本に触れることはできない。それができるとしたら、汝の死す時だけである。もし他の者が本に触れば、その者は雷に打たれるであろう。

汝、死する前に新たな守護者を選べし。

汝の意志に敬服し、強大なる魔法を授けん。されど、この書物なくば使うにあたわず。汝の進む道に祝福と幸運があらんことを祈る」

気付けばハナが興味深そうに、鼻をひくひくさせていた。

『そんな言葉が記されているのですか？』

「あ、そっか。ハナは動物だから、さすがに文字は読めないよね」

『いえ、私は精霊ですし、文字を勉強したので読めますよ。ですが、その本には持ち主にしか読めない魔法がかかっているんです。私が読もうとしても、文字がぼやけてしまつて……』